

「代筆できない僕らの気持ち」

その日花森さんは、僕から随分と遠い、体育館のステージの上に立っていた。

花森さんは、書道コンクールの高校生の部で金賞をとった。去年に続き、二回目の快挙だった。

校長先生から恭しく賞状を受け取る花森さんの隣、スクリーンに映し出された作品は、僕なんかには読めないほど達筆で、整っていて、綺麗だった。

花森さんはいつもきちんと背筋を伸ばし、誰よりも明るく笑顔でいる。そんな花森さんの人柄を表すような字に、僕は魅かれた。クラスメイトたちが眠そうに膝を抱えるなか、僕はまるで宇宙の真理を発見したかのような気分で、花森さんの作品を見つめた。

それからしばらく経った頃。

期末試験が終わった開放感とともに、校内に奇妙なブームが蔓延した。

ちょうど今、二年生が古典で習っている物語がきっかけとなり、女子たちの間で直筆の恋文を書くことが流行りだしたのだ。

スマホ一つでいつでもどこでもメッセージが送れるこの時代に、恋文とは。女子たちの考えることはよく分からないなあと呆れる男子も、どこか浮ついていた。もしかしたら自分宛の恋文が届きやしないかと、みんなちょっぴり期待しているのだ。

もちろん僕宛の恋文など届くはずもなく、他人事のように流行を横目に見ていた僕の耳に、聞き捨てならない噂が飛び込んできた。なんと花森さんが、「恋文代筆」を始めたのだという。

花森さんの「恋文代筆」は瞬間に人気が出て、連日行列ができていた。

僕は花森さんの後ろの席で、ひっきりなしに依頼が舞い込む様子を眺めていた。

さぞや儲かっているのだろうと思っただけで、どうやら代金は受け取っていないみたいだ。花森さんは恋文を代筆する代わりに、依頼人の書いた下書きをもらっていた。

またどうして下書きなんか、と思ったが、どうやら花森さんは色んな人の書いた文字を集めて分析するのが好きらしい。商売上手かと思っていたが、研究熱心の方だった。

花森さんは今日も僕に背を向けたまま、代筆依頼を受けている。

僕は机の中に忍ばせた手紙にそつと触れた。

夏休み目前のとある放課後、僕は花森さんが「恋文代筆」を閉店するという噂を聞いた。

——なんで、どうして急に？

僕は机の中の手紙を掴んで、今しがた教室を出て行った花森さんを追い駆けた。

書道部の部室へ向かう途中の花森さんに、僕は思い切って声を掛けた。

「花森さん、あの……！」

振り向いた花森さんは、僕の握っているものを見て「ああ」と言った。

「君も代筆希望？　悪いけど、今日で閉店するの」

「ど、どうして？」

ちよつと首をかたむけて、花森さんは言葉を探した。

「……最初はね、友達にどうしてもって頼まれたから書いてあげたの。その子がとても喜んでくれて、その上告白も成功したもんだから、それにあやかうって子が次々に押し寄せてきちゃって」

「嫌だった？」

花森さんは首を振った。

「ううん、むしろ楽しかった。わたしも悪い気はしなかったし。それで、タダで代筆するのもなんだから、下書きをもらうことにしたの。わたしね、人の書く文字を集めるのが趣味なの。手書きの文字って、その人のことをよく表していると思わない？　書く時の姿勢とか、ペンの持ち方とか。丸かったり、角張ってたり、小さかったり大きかったり。それが面白くて。みんなの個性豊かな文字を見るのは楽しかった」

「じゃあ、なんで……」

「でもね、当たり前なんだけど、文字が並ぶとそこには意味が発生するの。恋文の場合、意味というより気持ち、かな。恋心は十人十色なのに、わたしが代筆してしまうことで、その一番大事な気持ちが伝わらないんだって気付いたんだ」

花森さんは、僕を真っ直ぐ見つめた。

「わたしが書いた文字はお手本のように整って見えるかもしれないけど、ただそれだけの。大事なのはその気持ちを伝えたいという熱意。そのためには、やっぱり自分で書いた恋文を渡すことが一番なんだって思ったから、閉店したの。元々、夏休みまでって決めてたし。でも、いいよ。君が最後のお客さん。恋文代筆してあげよっか」

花森さんが僕に向かって手を伸ばす。

僕は、手の中で少しシワになった手紙に視線を落とした。

きつと花森さんに代筆してもらえば、何倍も素敵な恋文になるのだろう。

だけど――

「ごめん。代筆はいいや」

「そう。じゃあ――」

「その代わり、これ、読んでくれる？」

僕は手に持っていた手紙を、両手で花森さんに差し出した。

「これは……？」

「僕の気持ちです」

僕は顔をあげられないまま、自分のつま先を凝視した。背中に汗が流れるのは、夏だからだけじゃない。

「――ありがとう」

花森さんは僕の手から手紙を受け取ると、

「読ませてもらうね。君がどんな字で、何を書いたのか」

と言って、真面目な顔で手紙を読み始めた。

心臓がドキドキする。

伝わるだろうか。下手なりに、精一杯書いた僕の気持ち。

拝啓、花森さん。僕は、君のことが――